

箕輪遺跡

平成26年度民間店舗建設事業に伴う
埋蔵文化財第24次緊急発掘調査報告書

2015年

(有)アイワフードシステム
長野県上伊那郡箕輪町教育委員会

例　　言

- 1 本書は、平成26年度に実施した、長野県上伊那郡箕輪町大字三日町962番地4他に所在する、箕輪遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の発掘調査及び整理作業等の記録保存業務は、(有)アイワフードシステムより委託を受け、箕輪町教育委員会が実施した。
- 3 本書の作成にあたり、作業分担を以下のとおり行なった。
遺物の洗浄・注記・接合－小島駿、白鳥弘子
遺物の実測・トレース・拓本－小島駿、白鳥弘子、根橋とし子
遺構図の整理・トレース・挿図作成・図版作成－井澤はずき
写真撮影－柴 秀毅、征矢 進、征矢卓巳、井澤はずき
- 4 本書の執筆・編集は、柴 秀毅、井澤はずきが行った。
- 5 調査現場の空中写真撮影は、有限会社M2クリエーションに委託した
- 6 発掘箇所の記録は、世界測地系座標により位置を落とした。
- 7 出土遺物及び図面写真類と本書作成に関わる図版写真類は、すべて箕輪町教育委員会が管理し、箕輪町郷土博物館に保管している。
- 8 調査及び本書の作成にあたり、下記の方々並びに機関にご指導ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。
セブンイレブン箕輪三日町店／長野県教育委員会／三日町区／三日町区田中城常会／春日史朗
(敬称略)

凡　　例

- 1 挿図
 - ・挿図の縮尺は、各図の下部に表記（スケールを有するものも含む）した。
 - ・遺構実測図中におけるスクリーントーン及び記号による表示は、以下のものを表す。
 - 石
- 2 土器及び遺物観察
 - ・土層及び土器の色調は、『新版 標準土色帖』を用いて記してある。
 - ・出土土器観察表の法量の単位はセンチメートル (cm) で、残存度はパーセントである。また、現存する数値は「()」、推測される数値は「< >」、計測不能は「-」で表している。
 - ・石器観察表重量の単位はグラム (g) で表している。法量は、現存する数値は「()」で、計測不能は「-」で表している。
 - ・出土遺物の番号は、土器はカッコなし、石器は○、石製品は〈 〉で区別している。

本文目次

例言・凡例

本文目次

第1章 発掘調査の概要	2
第1節 調査に至る経過	2
第2節 調査概要と体制	3
第3節 調査の経過	3
第2章 調査結果	4
第1節 調査方法	4
第2節 土層堆積状況	6
第3節 造構と遺物	6
1 堅穴住居址	6
2 溝状遺構	10
3 ピット	12
第3章 総括	13
参考・引用文献	
図版	
報告書抄録	

第1章 発掘調査の概要

第1節 調査に至る経過

箕輪遺跡は、箕輪町三日町地区に所在し、天竜川右岸の氾濫原に位置する。遺跡地からの展望も良く、南東に南アルプス、南西には中央アルプスが展望できる。当該地は、戦後行なわれた耕地整理を経て広大な水田地帯であったが、遺跡中央を南北に継走する国道153号線バイパスの開通により、道路隣接地に大型店舗の出店が相次ぎ、開発が集中する地域となっている。

本遺跡は国道153号線バイパスの開設等に伴い、過去23回の発掘調査が行なわれ、弥生・古墳時代を中心とした遺構・遺物が出土している。

今回、有限会社アイワフードシステムが、2,960m²を用地とする飲食店舗を建設することになった。平成26年4月、同社から具体的な開発計画の提示があり、事業計画地が本遺跡包蔵地内にあたることから、埋蔵文化財の保護に関して協議を重ねてきた。同年7月、「埋蔵文化財発掘の届出」を受け、用地内の遺構の有無等を確認するため、試掘調査を実施した。その結果、遺構と遺物が確認されたため、再度2者による保護協議を行ない、店舗の基礎工事によって遺構の破壊が余儀なくされる範囲において、発掘調査による記録保存を図ることとなった。なお、駐車場については盛土により遺構の保存を図ることになった。

発掘調査は、同社の文化財保護に対する寛大なご理解とご協力により、同社から調査業務を委託された町教育委員会（生涯学習課）が実施することになった。



第1図 調査位置図 (1:50,000)

第2節 調査概要と体制

- 1 遺跡名 笹輪遺跡
- 2 所在地 長野県上伊那郡笠輪町大字三日町962番地 4他
- 3 事業期間 平成26年7月22日～平成27年3月14日
- 4 事務局
- | | |
|--------|---------------------|
| 教育長 | 唐澤 義雄 |
| 生涯学習課長 | 永井 正（平成26年9月30日まで） |
| | 日野 和政（平成26年10月1日から） |
| 文化財係長 | 柴 秀毅（笠輪町郷土博物館 学芸員） |
| 文化財係 | 小林 寛（　　） |
| 非常勤職員 | 井澤はずき（　　） 学芸員） |
| 非常勤職員 | 宮下 美鈴（　　） |
- 5 調査団
- | | |
|-------|--|
| 調査団長 | 唐澤 義雄 |
| 調査副団長 | 永井 正（平成26年9月30日まで） |
| | 日野 和政（平成26年10月1日から） |
| 調査担当者 | 柴 秀毅、井澤はずき |
| 調査団員 | 有賀多恵子、今関 貞夫、大串 進、小川 陽三、小島 駿、小林 堅良、白鳥 弘子、根橋とし子、堀川 利平、松崎 伸子、吉江 夏樹（※50音順） |

第3節 調査の経過

- 7月 22日 安全対策のバリケード設置。調査用重機(バックホー)を搬入し、表土を除去する。
- 23～24日 溝2本(南から1号、2号溝)、住居址2軒(北から1号、2号住居址)、ピット数基礎確認。
- 9月17～19日 1、2号溝と2号住居址、ピットの掘り下げ、測量、写真撮影。コンテナハウス、仮設トイレ設置。
- 24～30日 2号溝と2号住居址掘り下げと測量。1、2号溝全体写真撮影、1号住居址掘り下げ。
- 10月 2～3日 1、2号住居址内のピット掘り下げ、測量、写真撮影。
- 7～9日 1、2号住居址内のピット測量、写真撮影。
- 20日 ラジコンヘリによる空中写真撮影。
- 24日 1、2号住居址の床面はがし、写真撮影。道具片付け。
- 28日 1号住居址内のピット測量。
- 29日 中学生職業体験。道具片付け。仮設トイレ搬出。
- 31日 重機による埋め戻し。コンテナハウスの搬出。現場での調査終了。

第2章 調査結果

第1節 調査方法

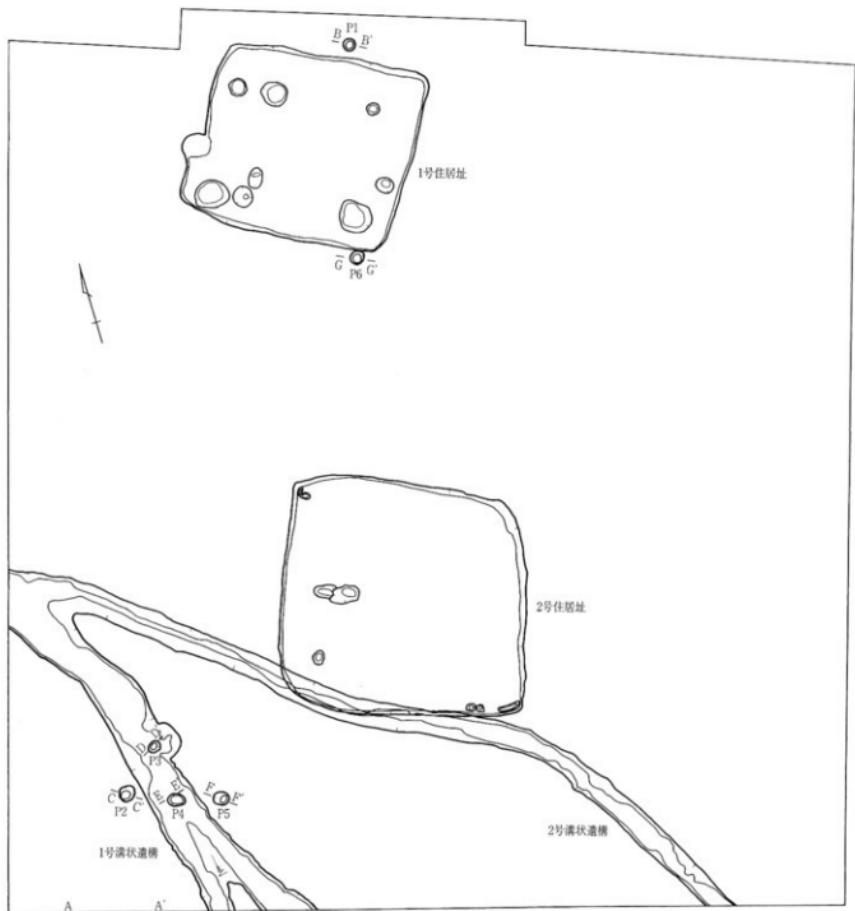
調査に際しては、事前に試掘調査を実施した。大型重機により遺構確認面直上までの表土を除去し、人力による遺構検出作業を進めた。その結果、南側に溝状遺構、中央部と北側に住居址を1軒ずつ検出した。これらの遺構は、平成12年に(財)長野県埋蔵文化財センターが実施した、国道153号線伊那バイパス建設工事に伴う発掘調査の際に検出された近世の溝と、弥生もしくは古墳時代の集落に属する住居址であることが予想された。そのため、建設予定地2,960m²のうち、店舗建設工事によって文化財が消滅することが予測される約400m²を本発掘調査の対象とした。

本発掘調査では、検出した各遺構の掘り下げを行なった。各遺構より出土した遺物は、覆土中の土器片については層位ごとに取り上げ、床面直上の遺物は記録後に番号を付けて取り上げた。

測量による記録作業は、平面図については主に業者委託で行ない、一部平板及び簡易造り方測量にて1:10、1:20縮尺で作図した。座標及び方位はトータルステーションを使用し、調査地全城を世界測地系の基準線を重ねて記録した。また、標高の基準点は、調査区南西部の境界杭に任意のベンチマーク×(663.29m)を設定した。写真による記録は、一眼レフデジタルカメラ撮影と、35mm一眼レフカメラによるカラーリバーサルフィルム撮影を行なった。なお、本書に掲載した遺物写真は、一眼レフデジタルカメラにて撮影した。



第2図 調査区設定図 (1:5,000)



第3図 調査区遺構配置図（全体図）

第2節 土層堆積状況(第4図)

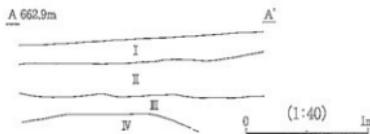
これまで実施してきた調査データを元に、本調査地の南西部において堆積層の分層とその把握を行なった。調査地は水田として使用されていた場所で、表層の黒褐色土は水田の耕土(I層)であった。その下は遺物包含層であるシルト層(II層)、砂礫層(III層)、白い砂利を含む砂利層(IV層)の4層に分けられた。遺構はII層確認面で検出した。各層の詳細は以下の通りである。

I層 10YR3/2(黒褐色)水田の耕土。II層との境に酸化鉄を含む。締り・粘性共に弱い。

II層 5Y4/2(灰オリーブ色)シルト層。遺物包含層。締りは強く、粘性は中。

III層 10YR2/2(黒褐色)砂礫層。締りは強く、粘性は弱い。

IV層 10YR4/1(褐灰色)砂利層。白い砂利を多く含む。締りは強く粘性は中。

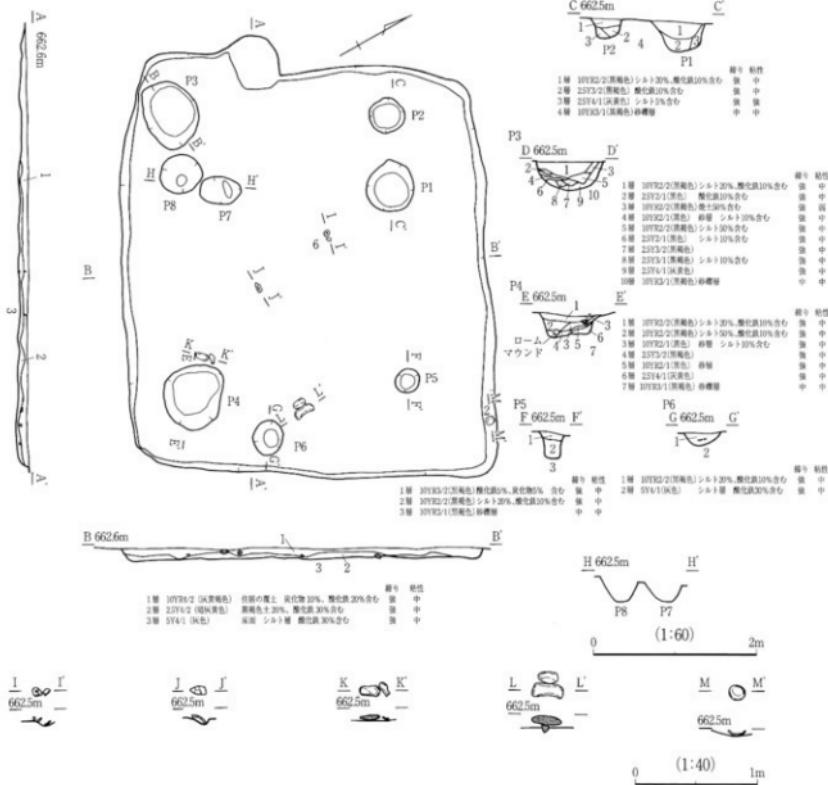


第4図 土層断面図

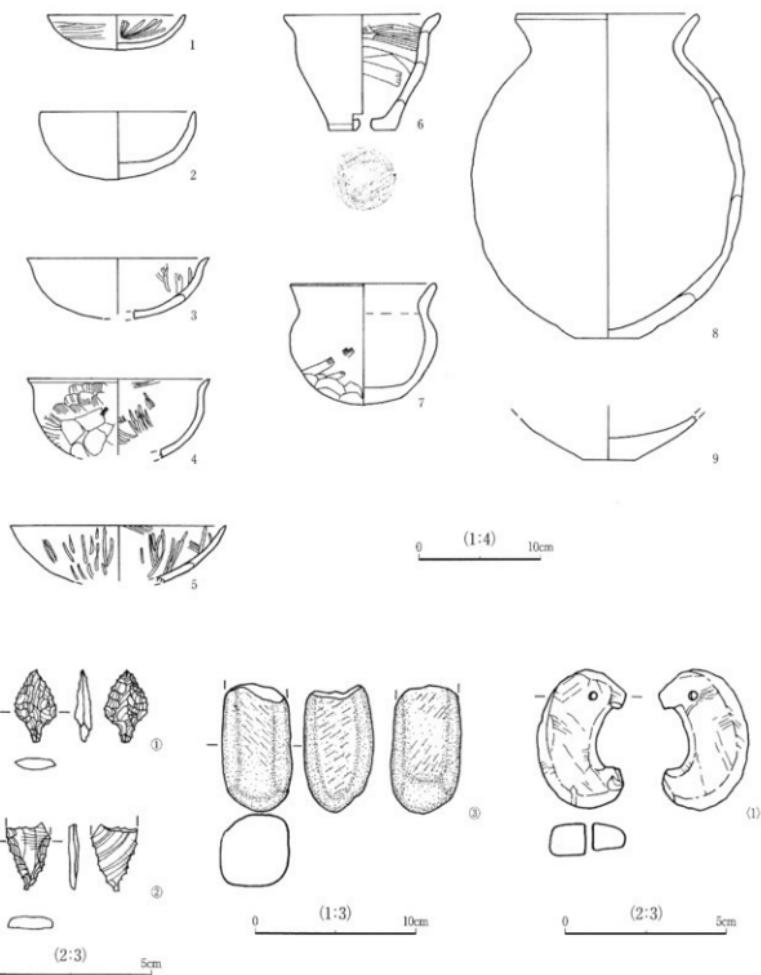
第3節 遺構と遺物

1 壓穴住居址(第5、6図)

位置：調査区北部、世界測地系X = -12155.3、Y = -46190.0に位置する。主軸方向：N - 60° - W。規模・形状：長軸5.44m、短軸4.50mを測り、方形を呈する。覆土：3層に分層され、シルト層(II層)まで掘り込まれる。床面・壁：試掘調査後、本調査にて掘り下げをするまでに2ヶ月間を要したこともあり、覆土は堅固だったが、床面は軟弱で、II層とIII層の境界が曖昧であったため、床面の判断が困難であった。壁は北側の一部において立ち上がりが判断できない箇所があったが、傾斜はほぼ垂直に立ち上がり、深さ約6~14cmを測る。壁下の周溝は検出されなかった。カマド：本址西側中央付近やや南寄りの壁に接して、カマドと思われる箇所が検出されたが、上部は削平されており、袖部、芯石、火焼面等は確認できなかった。しかし、形状からカマドと推測する。ピット：8基検出された。北東から検出されたP5は、位置・形状から柱穴と思われる。位置的には他にも柱穴と思われるピットもあるが詳細は不明。床下からは2基(P7、8)が検出された。P1からは石製模造品(1)が出土し、P4からは土器片が多く出土した。遺物：上層部分を削平されている(戦後の土地改良事業等と思われる)わりには、土器片が多く出土した。壺が多かったが、ほとんどの土器が焼成不良で、図示できた土器は壺(1~4)と高壺(5)、瓶(6)、小型甕(7)、壺(8、9)だけであった。このうち壺は丸底で、口縁が内湾しているものと外反しているものがあった。須恵器片もわずかに出土した。石製品では勾玉の模造品(1)が1点出土している。石器では石錐①②、磨石③が出土したが、流れ込みの遺物であろうか。各遺物の特徴は、観察表(第2~4表)を参照されたい。時期：古墳時代後期頃と推測する。



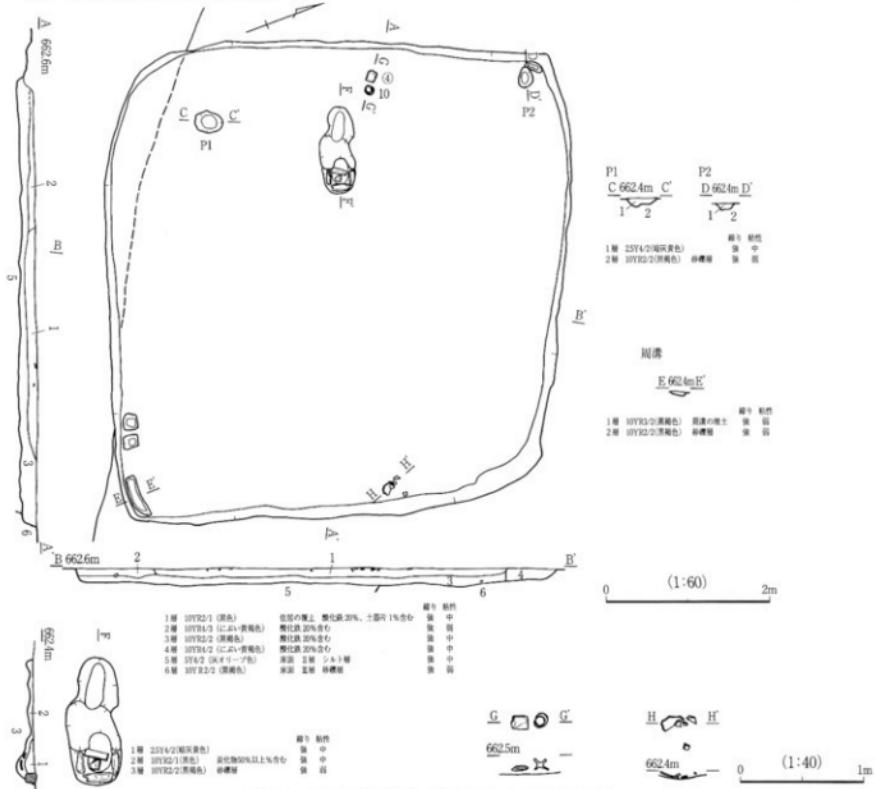
第5図 1号竪穴住居址実測図、遺物出土状況



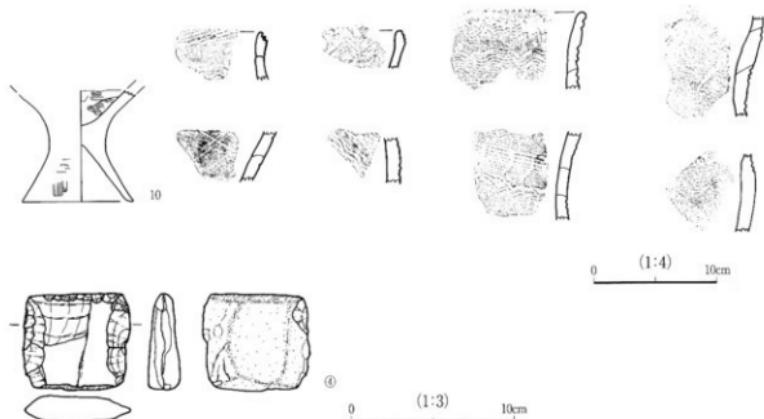
第6図 1号竪穴住居址出土土器、石製品、石器実測図

2号竪穴住居址（第7、8図）

位置:調査区中央部、世界測地系X = -12168.17、Y = -46190.80に位置する。**主軸方向:**N - 69° - W。**規模・形状:**長軸5.90m、短軸5.61mを測り、方形を呈する。**覆土:**6分層された。水田として使用されていたため、全体的に酸化鉄を含む。**床面・壁:**1号住居址同様、覆土は強固であったが、床面は軟弱であった。シルト層（II層）が床面の箇所と、シルト層がなく砂疊層（III層）が床面である箇所が混在していた。壁は南側の2号溝により一部壊されていたが、概ね検出できた。傾斜はほぼ垂直に立ち上がり、深さ約14~17cmを測る。壁下の周溝は北西と南東隅で一部検出された。**炉:**本址中央よりやや西側に検出された。コの形に石組みし、内部には土器片があった。しかし、火焼面は確認できなかった。**ピット:**2基検出されたが、いずれも掘り込みは浅い。**遺物:**1号住居址同様、上層部を削平されているわりには土器片が多く出土した。甕が4個体以上あると思われるが、復元是不可能で、図示できた土器も少なかった。高坏(10)が出土しており、また、形にはならなかったが波状文や簾状文が施されている土器片が多く出土し、赤色塗彩の土器片もみられた。石器では砥石を転用した加工品？④が出土した。各遺物の特徴は、観察表（第2、4表）を参照されたい。**時期:**弥生時代後期と推測する。



第7図 2号竪穴住居址・炉実測図・遺物出土状況



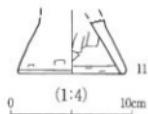
第8図 2号竖穴住居址出土土器・石器実測図、出土土器拓影図

2 溝状遺構

調査区の南側に溝状遺構が検出された。これは、途中から2本に枝分かれするため、南側を1号、北側を2号溝とした。この溝状遺構は、位置的に(財)長野県埋蔵文化財センターが平成12~15年に実施した発掘調査で検出されたSD01の続きではないかと推測される。

1号溝状遺構 (第9、10図)

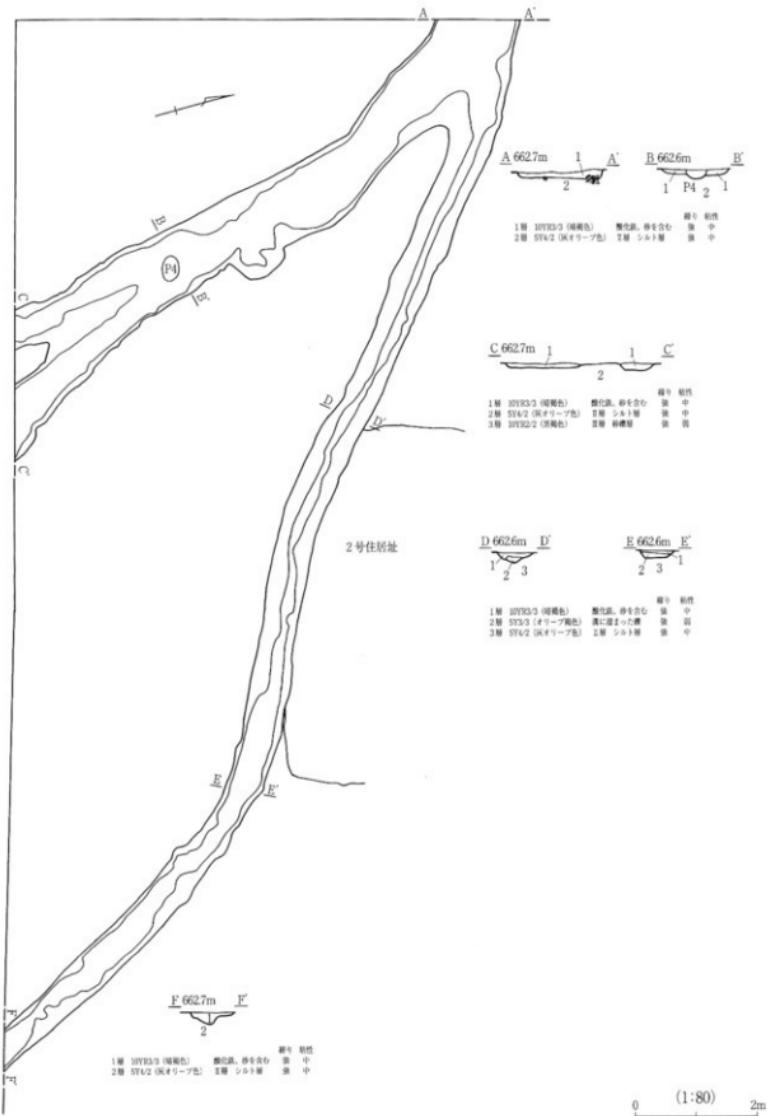
調査区をN-21°-W方向に横切り、南へ横断する。確認長は約10m、幅は約1.2~1.5mで、南で2つに枝分かれする。断面形は緩やかなU字で、検出面から底面まで深さ約4~11cmを測る。埋土は黒褐色砂質土の単層であった。出土遺物は古墳後期の土師器片が主体で、台付壺の台部(11)が出土している。



第9図 1号溝状遺構出土遺物実測図

2号溝状遺構 (第10図)

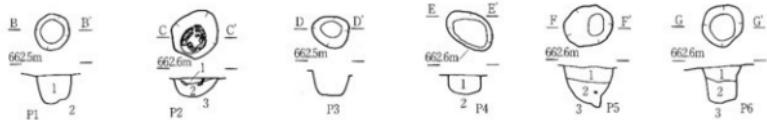
1号溝状遺構と枝分かれし、調査区をN-55°-W方向に横切り、2号住居址を切って、南へ横断する。確認長は約18m、幅は約0.5~0.6m。断面形は緩やかなU字で、検出面から底面まで深さ約14cmを測る。1号溝状遺構と比較するとこちらの方が深く、埋土は黒褐色砂質土の下に溝に溜まった砂礫が確認された。出土遺物は古墳後期の土師器片が主体だが、磨耗しており、図示できるものはなかった。



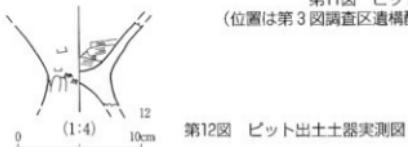
第10図 溝状遺構実測図

3 ピット(第3・11図)

1号溝状遺構周辺と1号住居址周辺にピット6基が検出された。P1から高環(12)が出土し、P2からは土器片が出土したが、その他のピットからは、遺物はほとんど出土しなかった。詳細はピット一覧表(第1表)を参照されたい。



第11図 ピット実測図
(位置は第3図調査区遺構配置図を参照のこと)



第12図 ピット出土土器実測図

No	規模(cm)			平面形	断面形	覆 土			出土遺物	備考
	長	短	深					締り		
1	30	28	23	円形	台形	1層 10YR3/1 (黒褐色) 酸化鉄・炭化物10%含む		強	中	高環(12)
2	42	35	15	円形	半円	1層 10YR3/3 (暗褐色) 酸化鉄含む 2層 10YR3/1 (黒褐色) 土器片含む		強 強	中 中	土器片
3	30	25	(20)	円形	台形	1層 10YR2/2 (黒褐色) 土器片1%、小礫含む		強	中	
4	42	28	(15)	楕円形	半円	1層 10YR3/3 (暗褐色) シルト1%、酸化鉄5%含む 2層 10YR3/2 (黒褐色) シルト5%、酸化鉄1%含む		強 強	中 中	
5	39	31	33	円形	半円	1層 10YR2/1 (黒色) シルト5%含む 2層 10YR3/2 (黒褐色) 酸化鉄・炭化物10%含む		中 強	中 中	
6	37	32	30	円形	台形	1層 10YR2/1 (黒色) シルト5%含む 2層 10YR3/1 (黒褐色) 酸化鉄・炭化物10%含む		中 強	中 中	

第1表 ピット一覧表

No	検出箇所	種別	器種	法量		残存度	成形	調整	特徴(文様)	色調	胎土	焼成	備考
				口径	底形								
1	1号住居	土器器	环	(11.5)	12	29	39	内面-ヘラミガキ 外面-ヘラミガキ	ほぼ丸底	10YR7/2 (にぶい黄褐色)	雲母含む	不良	
2		土器器	环	12.6	-	5.6	70	内面-不明 外面-不明	口縁部は直線的に立ち上がる。丸底	5YR7/6 (橙色)	砂粒含む	良好	
3		土器器	环	(14.8)	-	(5.0)	40	輪横み 外面-ナード	口縁部は直ぐ外反	25Y7(3) (浅黄色)	雲母・砂粒含む	不良	
4		土器器	环	(17.0)	-	(6.5)	25	内面-ヘラミガキ 外面-ヘラミガキ、ヘラケズリ	口縁部は直ぐ外反	5YR7/6 (橙色)		不良	
5		土器器	高环	(14.8)	-	(4.7)	20	輪横み 外面-ナード、ヘラナード	口縁部は直線的に立ち上がる	25YR5/8 (明赤褐色)	長石・雲母含む	不良	环部のみ
6		土器器	瓶	(12.8)	(7.4)	9.6	60	輪横み 内面-ハ外面-不明 (底部ヘラケズリ)	口縁部は直ぐ外反	10YR5/3 (にぶい黄褐色)	長石・雲母・石英含む	良好	底部に孔あり
7		土器器	小型壺	9.8	-	9.9	100	内面-不明 外面-ケズリ	口縁部は直ぐ外反	10YR5/4 (にぶい黄褐色)	長石・雲母・石英含む	良好	
8		土器器	壺	14.6	5.2	26.5	70	輪横み 内面-不明 外面-不明	側面部は球形に膨らむ。	7.5YR5/4 (にぶい黄褐色)	長石・雲母・石英含む	良好	
9		土器器	壺	-	4.0	(3.4)	10	内面-ナード 外面-ナード、ハケ		5YR5/4 (明赤褐色)	雲母・砂粒・石英含む	良好	
10		土器器	高环	(9.5)	(9.0)	(9.9)	40	内面-ナード 外面-ナード		10YR7/3 (にぶい黄褐色)	雲母・砂粒・石英含む	不良	
11	1号住居	土器器	台付壺	-	8.8	(4.6)	40	内面-ナード 外面-ナード		7.5YR4/3 (褐色)	雲母・砂粒・石英含む	良好	脚部のみ
12	P1	土器器	环	(10.4)	-	(6.7)	35	内面-ハケ 外面-ハケ、ナード		7.5YR8/3 (浅黄褐色)	長石・雲母含む	不良	

第2表 出土土器観察表

No	検出箇所	器種	材質	法量:長さ、幅、厚さ(cm)、重さ(g)				備考
				長さ	幅	厚さ	重さ	
1	1号住	石製模造品	滑石	4.3	2.3	0.9	17.5	完形品 空孔1孔

第3表 出土石製品観察表

No	検出箇所	器種	材質	法量:長さ、幅、厚さ(cm)、重さ(g)				備考
				長さ	幅	厚さ	重さ	
1	1号住	石 塵	墨岩石	2.2	1.2	0.3	0.7	完形 凸基有茎 床下より出土
2		石 錐	墨岩石	(2.1)	(1.4)	(0.3)	(0.7)	
3		磨 石	砂 岩	(8.0)	(4.2)	(4.3)		
4	2号住	砥石転用加工品	粘板岩	11.9	13.0	3.2	840	砥石を転用し、何かに加工する途中のものか?

第4表 出土石器観察表

第3章 総 括

ここでは検出した遺構について若干の所見を付け加え、総括としたい。

今回の調査箇所は、天竜川の氾濫原の中でも微高地にあたり、国道153号線バイパス建設に先立つ発掘調査の際、弥生時代及び古墳時代の集落跡が確認されている。そのため、遺構が多く検出されることが予想されたが、遺構は堅穴住居址2軒、溝状遺構、ピット6基の検出にとどまった。

1号堅穴住居址は古墳時代後期の遺構であった。上層は削平されているものの、遺物は多く出土した。また、2号堅穴住居址は弥生時代後期の遺構で、中央やや西側寄りに炉が検出された。これらの住居址は、箕輪バイパス建設時の調査で確認された集落と時期がほぼ同じであることから、同じ集落内の住居址であると考えられる。ただ、バイパスより住居址の密度が薄くなっている感があるため、集落の中心は当該地より西になるものと思われる。

溝状遺構も、バイパス建設の際に確認された近世の溝状遺構の続きであると考えられる。ピットは6基検出されたが、P1から高坏が出土したほかは、遺物はほとんど出土しなかった。

今回の調査では、微高地の集落跡が当該地まで広がることが確認できた。過去の調査で、当該地の東は低地であることがわかつていたため、集落の東端が確認できるかと思われたが、調査地の東部においては耕土の真下が砂礫層であり、上層部分が削平されていることが判明したため、明確な集落の東端は確認できなかった。

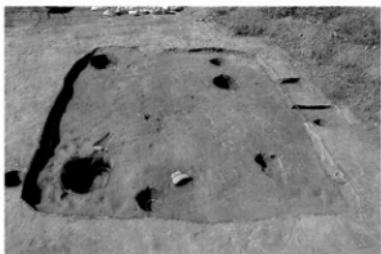
以上、今回の調査の成果を簡潔に述べた。本遺跡は、箕輪町の弥生時代及び古墳時代を考える上で大変重要な遺跡である。今後も継続して調査をしていかなければならない。

本書の末筆にあたり、調査の成果が郷土の歴史と文化を解明する上で有意義に活用され、より多くの人に文化財保護にご理解いただければ幸いである。調査の進行と本書の作成にあたり、ご支援ご協力をいただいた全ての皆様に厚く御礼申し上げます。

- 参考・引用文献
- 長野県史刊行会 1988『長野県史』考古資料編 全1巻(4) 遺構・遺物編
 - (著者名50音順) 長野県埋蔵文化財センター 2005『箕輪遺跡』-箕輪町内-
 - 箕輪町誌編纂刊行委員会 1976『箕輪町誌』第1巻 自然・現代編
 - 箕輪町誌編纂刊行委員会 1986『箕輪町誌』第2巻 歴史編
 - 箕輪町教育委員会 2004『箕輪遺跡』(第14・15次)
 - 箕輪町教育委員会 2006『箕輪遺跡』(第17次)
 - 箕輪町教育委員会 2009『箕輪遺跡』(第23次)
 - 箕輪町教育委員会 1997『箕輪町遺跡詳細分布調査報告書』



全体図（上が西）



1号竖穴住居址（東から）



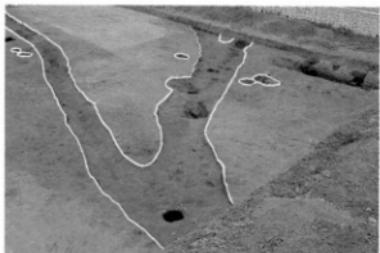
1号竖穴住居址遺物出土状況



2号竖穴住居址（東から）



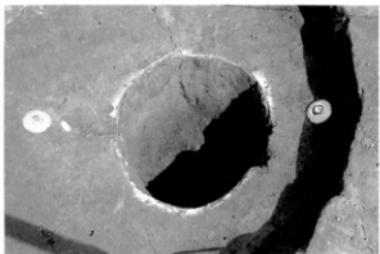
2号竖穴住居址炉（西から）



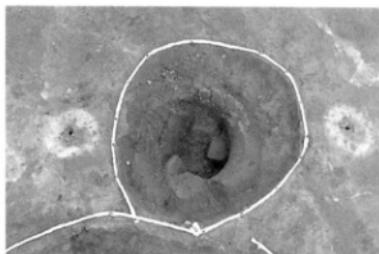
1号溝状遺構（北西から）



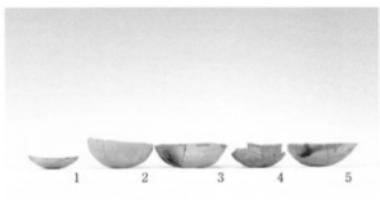
2号溝状遺構
(西から)



ピット1（南から）



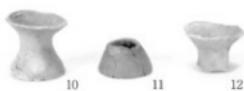
ピット2（南から）



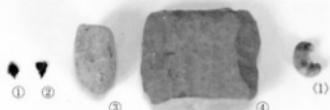
1号住居址出土土器（1）



1号住居址出土土器（2）



2号住居址、1号溝状遺構、P1出土土器



出土石器、石製品

報 告 書 抄 錄

箕輪遺跡

平成27年3月発行

編集・発行 (有)アイワフードシステム
長野県上伊那郡箕輪町
教育委員会

印 刷 龍共印刷株式会社
